学生主体の運動部活動における主将のリーダーシップに関する研究

佐藤竜樹　（　奈良教育大学　）

１．目的

本研究の目的は､大学硬式野球部の指導者の有無、チームへの関わり別、指導内容のよって主将のリーダーシップに違いが見られるかを三隅(1984)の PM 理論を用いて明らかにすることである。

２．研究方法

村井ら(2010)の「キャプテンの理想像に関する質問紙 33 問」を参考にキャプテンのリーダーシップに関する調査紙(5 件法)を作成し、Google フォームを用いてアンケート調査を行った。

１）対象者：K 学生野球連盟に属する 13 大学の学生 884 名(有効回答数：354、有効回答率：40.2%)

２）調査期間：2023 年 11 月上旬（1 週間）

３）分析方法：主将のリーダーシップのＰ機能(3 因子)・Ｍ機能(2 因子)が、指導者の関わり大群と関わり小群で、また、指導者の指導内容による 3 つの群で、異なるかをマンホイットニーの U 検定およびクラスウォリス検定によって分析した。指導者の関わり大群と関わり小群の分類については、指導者の練習参加頻度、試合等の采配を学生か指導者どちらが行っているのかを基準に群分けを行った。

３．結果と考察

１）指導者の関わり別による主将のリーダーシップ

指導者の関わり別で主将のリーダーシップを比較した。有意差が確認されたすべての因子において指導者の関わりの小群の主将のリーダーシップは指導者の関わりが大群の主将のリーダーシップよりも中央値が有意に高い値を示していることが明らかになった。(表 1)

表 1.指導者の関わり別の主将のリーダーシップ比較

	関わり小（ｎ＝95）	関わり大（ｎ＝259）	有意確率
目標志向性（Ｐ機能）	5.15 (4.38-5.85)	4.85 (3.92-5.69)	.036
人間関係の維持発展(Ｍ機能)	5.33 (4.56-5.78)	4.67 (3.67-5.56)	<.001
メンバーへの激励(Ｍ機能)	5.00 (4.00-5.60)	4.60 (3.80-5.60)	.023
競技能力（Ｐ機能）	5.33 (5.00-6.00)	4.33 (3.33-5.33)	<.001

中央値(25%タイル－75%タイル)

２）指導者の指導内容別の主将のリーダーシップ

次に、指導者の指導内容別に主将のリーダーシップの比較をした。すべての因子において有意差が確認された。その内、目標志向性因子、人間関係の維持発展因子、メンバーへの激励因子は、中央値を比較すると技術指導中心群の主将のリーダーシップが他の群よりも有意に高いことが示された。競技能力因子と競技知識因子においては､技術指導中心群と、生活指導群は同じ値である。(表２)

表２　指導内容別の主将のリーダーシップ比較

	両方 (n=177)	技術指導 (n=138)	生活指導 (n=27)	有意確率
目標志向性（Ｐ機能）	4.62 (3.69-5.54)	5.31 (4.67-5.85)	4.62 (3.00-5.46)	<.001
人間関係の維持発展(Ｍ機能)	4.22 (3.39-5.33)	5.33 (4.67-5.78)	4.78 (3.22-5.67)	<.001
メンバーへの激励(Ｍ機能)	4.00 (3.60-5.30)	5.20 (4.40-6.00)	5.00 (3.00-5.80)	<.001
競技知識（Ｐ機能）	4.33 (3.33-5.33)	5.00 (4.33-6.00)	5.00 (3.67-6.00)	<.001
競技能力（Ｐ機能）	4.00 (3.33-5.33)	5.00 (4.58-6.00)	5.00 (3.00-6.00)	<.001

中央値(25%タイル－75%タイル)

４．結論

本研究では、指導者の関わりが小さいチームの主将のリーダーシップはＰ機能、Ｍ機能両方において高く発揮されること。指導者の指導内容が技術指導中心のチームの主将のリーダーシップもＰ機能、Ｍ機能両方において高く発揮されることが明らかになった｡よって､指導者のチームへの関わりの大小や、指導内容は、主将のリーダーシップに関連していると考えられる.以上のことから,大学運動部活動において主将が高いリーダーシップを発揮するためには、学生の主体性と指導者による管理・指導のバランスが重要になると考える。

＜参考文献＞

1) 三隅ニ不ニ(1978)リーダーシップ行動の科学.有斐閣.

2) 村井剛・猪俣公宏(2010)勝利志向型チームスポーツにおける理想のキャプテン像について.実験社会心理学研究, 50(1)：28-36.